雑誌「教育と医学（26巻11号）」に寄せた所以である。

7）病院臨床の実践では，相変らず精神障害者の治療面接が主体となっている。ただ最近これら障害者をめぐる家族の問題はかなり厳しいものがあり，その意味からも，間接的にではなく，より直接的に家族そのものとつきあう頻度が重なってきた。こうしたアプローチをとおして，障害者の家族力動を今少し明らかにしていきたいと考える。今年度から臨床棟で始めたリサーチ・カンファレンスの機会に「家族とつきあうということ」と題するごく最近の症例を提起したのも，この線にそってである。

ロールシャッハ法に関しては，昭和54年度科学研究費を得ることが出来たこともあって，今年は視点を若干かえ，数名の研究仲間と共に，ロールシャッハ反応に示される「思考・言語カテゴリー」の再検討を試みはじめている。

8）学生相談活動に関しては，昨秋，厚生補導特別企画の援助に基づく，名古屋大学では2年目の学生エンカウンター・グループに参加してファシリテーター・ロールをとった。教官エンカウンターには，第2回以降，今夏の第5回河口湖におけるグループまで，4年つづけて参加してきたが，学生とのグループ体験ははじめてであり，私にとってはきわめてフレッシュな新しい出会いの契機を与えてくれたものとして印象深い。学生諸君同様，私自身にとっても自己を再発見することの出来たよい体験であった。

この1月，京都大学が当番となっての恒例の学生相談研究会議では，今回特に不本意入学の大学生をめぐって活発な討論会が行われた。私自身，最初のセッション「来談傾向よりみた新入生の問題」での司会の役割をになったが，たまたま共通一次元年ともよばれる本年であるだけに，次回は，それに伴う大学適応状況についての検討をすすめることが要望され，その準備を私ども名古屋大学で引きうけることになった。これまたそれに忙殺されそうになっている昨今である。

（昭和54年8月17日）

研　究　経　過　報　告

鹿　内　啓　子

1. 帰属理論について

帰属作用における個人差，中でも self-esteem の影響について研究を進めてきた。昨年までは，自己の行動結果の帰属に対して self-esteem がどのような影響を及ぼすかを，中学生および大学生を被験者にして検討した。その結果，ある程度の一貫した結果が得られた。

この一年では，self-esteem が社会的な相互作用を通して形成されてきたことを考え，他者の行動結果の帰属に及ぼす self-esteem の影響について検討した。まず始めに中学生を被験者として実験を行なったが，この結果は日本心理学会第43回大会において発表する予定である。また，この研究では，成功・失敗の程度が一定に操作されていなかったなどの手続き上の様々な不備がみられたので，次に大学生を被験者として個人実験を行なった。この実験は終了したところであり，現在データの分析を行なっている最中である。

昨年の経過報告に，self-esteem の高低による帰属作用の差異が達成動機にどうかかわるかを検討することを考えている．と述べたが，この点については残念ながら検討できなかった。今後は，self-esteem が帰属作用それ自体に及ぼす影響だけでなく，それが後続の行動，特に達成行動にどう影響するかを検討していく予定である。

2. 対人関係の成立と発展について

大橋正夫教授他のメンバーからなる社会心理学研究会の共同研究で行なっているものである。

未知の者がどのように対人関係を発展させ，集団がどのように構造化されていくかを明らかにすることは，社会心理学の基本的問題の一つであるにもかかわらず，資料収集の困難さなどからあまり取り組まれてこなかった。昨年度の紀要に，女子大学生を対象にしてパーソナリティの認知とソシオメトリックな認知について継続的に資料を収集した結果をまとめて報告した。しかしここでは，第一回の調査が入学後すでに約一ケ月過ぎた時になされていること，各回の調査での欠席者がかなりいたこと，大学生であるために，一応クラス分けはされているもののクラスが明確な一つの集団となっていないこと，などの不都合があった。そこで，形の明確な集団について，未知の者が顔を合わせた直後から継続的に調査をしたいと考えていたところ，幸い，本学部附属中学校のご協力を得ることができた。中学1年生の2クラスを対象に，一学期の始業式の日から，同性の級友に対するソシオメトリックな感情とその認知，およびパーソナリティ認知

について，原則として毎週1回ずつ調査してきた。また性格検査など対人関係とかかわりがあると思われる事柄についても臨時的に調査した。2学期も間隔を広げて調査する予定である。

現在，一学期に収集したデータを整えた段階であり，分析は今後に残されている。対人関係や集団構造の発達の様子がどの程度明らかにされるか楽しみにしている状態である。また長期にわたってご協力いただいた附属中学校の先生方のお役に立てるような結果が得られれば，と願っている。

研究経過報告 —'78年秋～'79年夏—

小　嶋　秀　夫

ここ1・2年，つくづく思うことは，自分が1年間外国で過ごしたことの最大の効果は，研究面での脱制止であった。自分の専門からかなり離れた研究領域であっても，興味を持てば大いに発言するだけでなく，場合によっては積極的な研究活動をもする——。ちょうど，自分の内面的状態とも適合していたのか，このようなモデルの何人かに触れることによって，「専門外のことに口出しすべきではない」という精神的制約が，かなり緩み始めたのである。それが有意味な結果をもたらすのか，それとも一時の空騒ぎで終るのかは，まだ見極めることができない。

〔歴史的視点から見た親子関係と児童発達〕　昨年度に述べた「児童観」は，この領域での中心的概念の1つである。現在までの仕事は，理論的（日教心21回総会発表予定），概念的（日教心20回総会），方法論的（日教心20・21回総会），歴史的（教育学講座3・4巻，学習研究社，1979）なものであった。これらは，まだまだ拡大・深化させる必要があるが，徐々に実証的研究を加えて行く段階が近付いていると思う。子どもの発達に，それについてのおとなの信念体系が重要な役割を果すという考えは，ETSのIrving Sigelも持っていることが分った。私とほゞ同じ期間（2年強）のうちに，少くとも実証的データに関しては，彼が何歩も先んじていることが分り，ショックであった。しかし，私は，歴史的背景から押えて行くことの有意味性を信じている。児童発達研究と歴史的・社会的要因の問題については，児童心理学の進歩，1979年の概観の章でも述べた。

〔親子関係〕　親子関係を中心とした人間関係の捉え方を分類する2次元のカテゴリーを提案した（日教心20回総会記念シンポジウム，川島書店　近刊）。また，人間の生活と発達に対して，家庭での経験がもつ意義を明かにする研究法の枠組みを検討した（古畑・小嶋編　家族心理，有斐閣　近刊）。

〔発達研究法〕　児童心理学の進歩，1979の概観の章では，発達研究を分類する1つの方法を提案した。また，発達に関する諸概念と研究法を，私なりに整理してみた（金城ほか　心理学概論，有斐閣　1980）。

〔認知様式〕　MFF（熟知図形組合せ）検査の日・米・イスラエルの比較をした論文が出た（Salkind, Kojima, & Zelniker, Child Development, 1978, 49）。MFFにおける選択位置偏好（Kojima, 1976）による誤数の測度の信頼性の低下は，北アイルランドでも見出された（Cairns & Cammock, Developmental Psychology, 1978, 14）。また，場依存性の論文（Kojima, 1978）については，デンマークのNyborgと誌上での論争を進めていくことになっている。（1979年8月）

研　究　経　過　報　告

池　田　博　和

昨年11月に本教室員になって以来，すでに10カ月が過ぎようとしている。着任後の初仕事は，文部省科学研究費の申請書を書くことであったが，最近これがとおったという内定通知を受け，これほど嬉ばしいことはないと思っている。

年が明けて1月早々，第12回全国学生相談研究会議が京都で催されたが，これに出席し，学生の様々な臨床的問題をきいている中で，私の中にある考えが醸成されていった。そこで受けた刺激が大きな契機となって，前からの課題であった「青年期危機 — 現存在分析の立場から —」（「心理臨床の実際　第8巻　青年期危機」福村出版　印刷中）が書きあげられた。これは方法論的な立